OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「国性爺合戦」の竜虎
Author(s)	信多, 純一
Citation	語文. 1987, 49, p. 10-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68767
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『国性爺合戦』の龍虎

信多純一

一

地方芸能の一つに虎舞がある。獅子頭に代って、虎の頭を冠り舞う芸能であるが、主に太平洋岸の漁港に存し、北は岩手県釜石、南は鹿児島県出水市に至るまでの広く分布し、時には山村部にも見られる。最近、佐藤彰氏が「民俗芸能研究」第二号に、『「虎舞」系譜考―静岡県南伊豆町小稲の事例をめぐって―』を発表され、この地での虎舞の展開を跡づけておられる。それによれば、近世初期に始まり、本来の虎舞だけの芸に龍の舞も加わり、さらに『国性爺』の影響下に和藤内の虎退治の演出も工夫されて今に至るもののようである。近松の浄瑠璃の直接影響下になるというよりは、歌舞伎『国性爺合戦』の民俗芸能化と見られている。

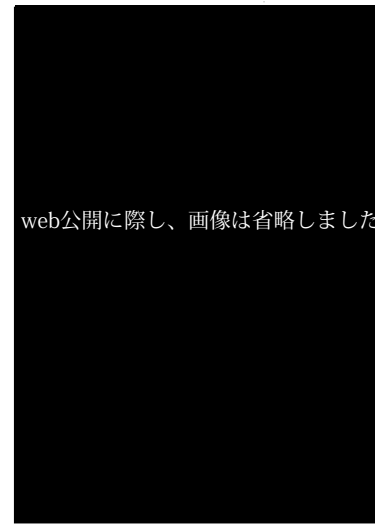
近松の同作二段目切「千里が竹」の、和藤内の虎を相手とした荒事芸は大きな評判を呼び、このように歌舞伎化、地方芸能化し、画題にもなり、五月の幟の類にも用いられた。

ついでに記せば、近松作品が意外な地方芸能に生きる例として、大阪府泉佐野市春日社雨乞踊の先芸、〔富士巻狩〕の場合を挙げておこう。その詞章は明らかに『世継曽我』初段切の「狩場の高名」の場面のそれで、荒四郎・藤太が朝比奈に彼等こそ新たな敵ときめつけられる箇所の芸能化であった。

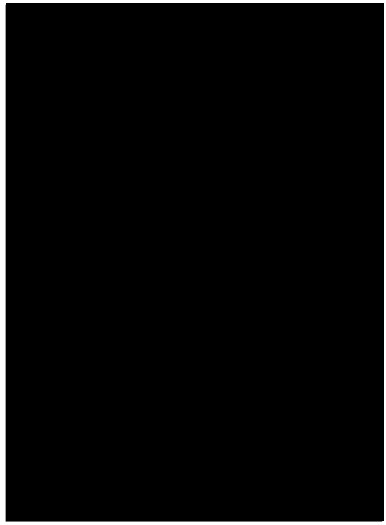
さて、当の近松の『国性爺』の虎は、どのように演出されたものであろう。初演時の様相は明らかでないが、四度目寛延三年七月大坂竹本座でのそれは、番付によれば助三郎・才治・門三郎の三人の人形遣によって演じられ、「二段目の虎本皮にて張り、眼杯も働きをな」す、所謂縫いぐるみ様の大虎であった（『浄瑠璃譜』）。その限りでは虎舞の虎に形の上では近いものであったろう。

二

『国性爺合戦』に虎を使ったことは近松の功の一つであるとして、水谷不倒氏はその思い付きの拠り所を探られた（『歌舞伎研究』十二輯・昭和二年五月）。氏は江戸の団十郎の荒事芸に淵源を求められ、元禄十六年十一月市村座上演『源氏六十帖』の狂言本がヒントとなったのではないかと推測された。それに対し、向井芳樹氏は近松自身の作、正徳元年上演の『大職冠』に現われた万戸将軍献上の虎と



『兵根元曽我』



『座敷操御前軍記』

の関係を考えることの方がよいのではとされている（『近松の方法』昭和五十一年九月）。

確かに勇力の和藤内の形象化に際し、近松が団十郎等の荒事芸の系譜を考え、その扮装にも影を落していることは、ここに掲げた二図の比較によってもうかがえるところである。大広袖を肌抜ぎにした、『兵根元曽我』の五郎と和藤内の扮装によっても瞭然であるし、『押戻』の団十郎の扮装で、籠手当に腹巻、大広袖に簑笠をつけ、大太刀の柄に手をかけぎめくその姿は、三段目切の紅流しの場で、岸頭に簑打ちかずき、川水に心を付けて打ち守る和藤内の姿とかぶさる。

さらに、虎の出現に「…わが勇力。唐へ渡って力始め。神力ますく〳〵日本力刃でむかふは大人気なし。虎はおろか象でも鬼でも一ひしぎ」と待ち受けるこの言葉の中に、象を引裂く中山伝九郎の荒事（『薄雪今中将姫』・元禄十三年）なども想起される。

一方向井氏の『大職冠』との関連の指摘については如何であろう。正徳元年十月、朝鮮人来聘の当込と考えられているこの作は、共に中国種であることや、『国性爺』正徳五年の上演に比較的近いこと、『国性爺』二段目平戸の浦の唐人詞頓作の可笑味は、『大職冠』二段目のそれを踏襲していることなどを考えると、確かに関連があると思われる。したがって、初段の唐の帝よりの多くの献上品の中に「象一疋虎豹二疋」があり、五段目大切で味方が入鹿にこの虎をけしかけ、入鹿が二つに引裂く勇力の場面があるが、これとの関係で考えるべきではないかという向井氏の所説も考慮に入れる必要があろう。

ただ、こうした猛獣を相手の勇壮の立ち廻りといえば、他にも事

例がある。『国性爺』の前年大当りを取った『天神記』初段の切に、菅丞相の家臣倶利加羅太郎が主の為、時平の放った熊と格闘し殺す場面がある。これも唐の使者と絡んでの葛藤の一局面であるが、その文辞は、

さすがの猛獣。いき切てよはる所を引よせ〳〵。おづつをつかんで岩かどにつゞけさま二三十。ばった〳〵と打つくれば。ほねはくだけてかは袋。…

とあって、『国性爺』の次の場面と似通う。

恐れわななき岩洞に隠れ入る。尾筒をつかんで刎返し。打ちふせ〳〵怯む所を乗つかかり。足下にしつかと踏まへしは…

さらに、近松が執筆に当ってもっとも多く参照した『明清闘記』巻四には、国姓爺を初め諸将の力業を競う場面がある。「鄭成功被レ封二延平王一事付力態事」の章がそれで、賜物の絹布の巻物を国姓爺がまるで刀で切そろえたように捻切るのを皮切りに、甘輝の水牛を一打に殺す力業が続き、それぞれ大力を競い、馬を乗しめてあばら骨を折る者、水牛の角を打折る者等の勇壮の様を次々と描く。そうして最後に古来の勇力の士を挙げ、

又馮婦と云者は、臂をかゝげて。能ク虎を取縛る。かゝるためしは多しとは申せ共。当世に在ては。尤モ珍敷躭(メヅラシガラ)なりとぞ。

と結んでいる。これなどもまた原據の一つと言い得るものではなかろうか。

しかし、問題は何故この二段目末、三段目の前にこうした「千里が竹」の局面が置かれ、虎を相手の勇壮の場が描かれているのかという点にある。虎自体は唐の代表的猛獣であり、日本の勇者が威を示す相手としては、ごく自然に考えられる対象であって、その原據を一つに求めることは容易ではないからである。虎との闘いのみに注目しないで、劇の中での位置づけの問題を絡めて考える時、或いは作者の意図が浮かび上るのではなかろうか。

三

『国性爺』二段目は、肥前松浦平戸の浦の場、唐土の浦、次いで「千里が竹」の場と移る。その平戸の浦の場は、夫和唐内を涙で見送る妻小むつの足摺で終る。その夫婦の別れの悲哀を、近松は主に謡曲『俊寛』の詞章を用いて作文している。

それに続く舟路の道行文は次の如くである。

〳〵別れ行く　舟路のすゑも。しらぬ日の。筑紫は雲に埋めども跡に。おうごの。神風や。千波万波を押しきつて。時もたがへず親子の舟。唐土(もろこし)の地にも着きにけり。

この詞章は謡曲『龍虎』を用いていることを知る。渡唐渡天を思い立った旅僧（ワキ）、その従僧二人（ワキツレ）達が、九州博多の津より便船を求め海を渡る。

道行三人　天の原。八十島かけて漕ぎ出づる。〳〵。船路の末も不知火の。筑紫を後になしはてゝ。行くへにつゞく雲の波霞を分くる海原に。又山見えて程なく。早唐土(もろこし)に着きにけり〳〵。

ワキ詞　あらうれしや候。遙々と思ひしに。仏神の御加護もや有りけん。行人安穏に布帆恙もなく渡唐つかまつりて候。

この如く、謡曲の「道行」と「ワキ詞」を合せて道行文を形成している。親子三人が二艘の舟に分れ同時に同じ地に着いたという奇瑞を、神の擁護と近松は記すが、謡曲も三人の僧の仏神の加護による無事の渡唐と記す。謡曲によき便船とあるが、『国性爺』も栴檀

皇女の唐船にそのまま打乗って渡唐する。

この後、『国性爺』では父一人が道を変え和唐内に千里が竹の所在を教え、それを過ぎ尋陽・赤壁を経て、娘が嫁している甘輝の獅子が城で再び出会おうと父子は東西に別れる。

謡曲では、ワキが遠山本の群竹の霞こめた風情に心惹かれ、折から来かかった老樵夫二人（シテ・ツレ）に竹林の景の不審を問う展開がある。山人はそれに答え、竹林の巌洞に虎が住み、向うに見える高山より龍が舞い下り龍虎の争いの見られることを告げる。この言葉の中に、「虎はかりそめに。住むも千里の道しめて。住家と定むとか。もとより竹は…」と、「千里が竹」という『国性爺』の地名とつながる文辞がある。

このように、謡曲ではワキとシテの問答の中で虎の住む竹林の由来が説かれるが、近松は父の言葉の中で虎の住む千里が竹を説明させ、父と母子を別れさせている。

こうして謡曲では、家路に帰るシテの山人二人とワキ僧達は別れゆくことで前場は終る。後場は、

ワキさても不思議や山人の。教のまゝに山路を分け。竹林を遙に見渡せば……

という詞章で始まる。『国性爺』千里が竹の場は、次の文句で始まっている。

教へに任せ和藤内「人家を求め忍ばん」と。かひ〳〵しく母を負ひ…たつきも知らぬ岩巌石。枯木の根ざし滝津波。飛びこえ跳こえ飛鳥のごとく急げども。すゑ果てしなき大明国。人里絶えて広々たる千里が竹に迷ひ入る。

と謡曲と同様の文辞と状況に描く。「人家を求め忍ばん」の言葉が入るのは、先に父が「和藤内は母を具し。日本の猟船の吹き流されしと。頓智を以て人家に憩ひ追ひ付くべし」と示されたこととつながるのであるが、謡曲でシテの山人が龍虎の争いを見るには「竹の林の此方なる。巌の陰に立ちよりて。身を隠し見給へと」と教えて去ったことの翻案であろう。

この後『国性爺』では、千里が竹に迷い入り狐がなぶるかとなお奥深く進むうち、人声と楽器の音がし、折柄、

空冷まじく風起り。砂をうがち　どう〳〵〳〵。竹葉さつと巻き立て〳〵吹き折る。竹は　剣のごとく　冷まじなんどもおろかなり。

という状態になる。これは、謡曲の「もとより虎乱の勢猛く。左も右も。剣の如くに竹枝を折って」という切の舞働の箇所の文辞と、「風枝粛颯として。秋の声より凄じや」とを併せたような表現となっている。和藤内がこれに臆せず虎狩と察し、

「ここは聞ゆる千里が原。虎うそふけば風起る　猛獣の所為と覚えたり。……わが勇力。唐へ渡つて力始め。神力ます〳〵日本力　刃でむかふは大人気なし。虎はおろか象でも鬼でも一ひしぎ」と。尻ひつからげ身づくろひ　母を囲うて立つたるは。西天の獅子王も。恐れつべうぞ見えてげり。

と待ち受ける。この言葉の中の諺は当然『龍虎』の中にも見え、「龍吟ずれば雲起り。虎嘯けば風生ずと。聞きしもまのあたりに見るこそ不思議なりけれ」と表わしているが、和藤内が虎と対峙せんとするその猛き有様は正に『龍虎』の龍そのものの姿であり、その意気込みは龍のうそぶきに相当するものといえよう。

近松はこれに続く場面を果して次のように描く。

案にたがはず吹く風とともに　あれたる猛虎の形。ふし根に面をすり付け〳〵岩角に爪をとぎ立て。二人をめがけ嗥(いば)みかかるを事ともせず。弓手になぐり妻手に受け。もぢってかくれば身をかはし　たゆめば。ひらりと乗りうつり。上になり下になり命くらべ根くらべ。声を力にえい〳〵〳〵。虎の怒り毛怒り声山も崩るる三重へ〳〵ごとくなり。

この格闘場面は謡曲の次の表現、

巌洞にこもれる虎の。現れ出づれば岩屋の内より悪風を吹き出し。一方に雲を。吹き返し。敵を追風(おいて)にいきほひ勇む。恐ろしかりける。気色かな。かゝりける所に。〳〵。金龍雲よりおり下つて。悪虎を取らんと飛んでかゝり。飛龍の戦。隙もなし。舞働　シテ　もとより虎乱の勢猛く。左も右も。剣の如くに竹枝を折つて。金龍にかゝれば。悪虎を巻かんと。おほひかゝるを背けて追つつめ食はんとすれば。金龍雲居に遙に上れば。悪虎はいきほひ巌に上り。遙に見送り無念の勢あたりを払ひ。

という龍虎の争いの場面と重なる。風と共に虎は現れ、折から舞い下りた金龍と身をよじり、上になり下になり闘うのである。「弓手になぐり妻手に受け」の文辞も、「左も右も。剣の如くに竹枝を追つて」の表現と対応するであろう。また共に虎の怒りの激しさを言い表わしている。

この激闘もやがて収まる。『国性爺』では母が乗り出し、畜類と力立てして神より受けた身体髪膚怪我するなと、伊勢の御祓を渡し虎に差し向けさせる。

猛りにたける勢ひも。忽ち尾を伏せ耳を垂れ。じりり〳〵と四疋を縮め。恐れわななき岩洞に隠れ入る。尾筒をつかんで刎返し。打ちふせ〳〵怯(ひる)む所を乗つかかり。足下にしつかと踏まへしは……

と神の威力をここでは示す。謡曲の結末は、

悪虎はいきほひ巌に上り。遙に見送り無念の勢あたりを払ひ。又竹林に飛び帰り。又竹林に。飛び帰つて。其まゝ巌洞に入りにけり。

とあって、岩洞に入るという局面の類似を除けば、近松は虎を威力によって帰伏させるという趣向に変えている。

このように、近松は謡曲『龍虎』の構成・文辞を自己薬籠中のものにして、自在に翻案作文し、『国性爺』の虎を創り出した。

四

『国性爺』ではこの後、虎をめぐって李踏天の将安大人及びその部下と和藤内の間の争いとなり、結局安大人は殺され、部下は降参し、月代を剃られて日本流の頭となり、それぞれ滑稽な名を貰うという、三段目悲劇の直前に笑いの要素をはさんで二段目の幕は閉じられた。

三段目は獅子が城楼門の場となる。春夜月明の下、老一官及び和藤内その母は聟と聞き及ぶ甘輝の城に到着する。夫の留守を預る錦祥女と、楼門の上下で父娘の対面がある。父である証拠をという言葉に、一官は自分の姿絵を乳人に預けておいた、それと合わせ見よと述べると錦祥女は肌身離さぬ姿絵を押し開き、柄付けの鏡を取り出だし、父の顔を鏡に映し、絵と引き合わせて見るという有名な局面がある。このややわざとらしい鏡の演技の趣向は一体何の為であったのであろう。

「千里が竹」においてその形成に大きな役割を果している謡曲『龍虎』、この前場シテ・ツレの登場場面で、次の詞章がある。

シテ　ツレ　梢も殊に色深き。木陰によれば心なき。身にもあはれは有明のつれなき命ながらへて。又廻り逢ふ春べかな。誠に知んぬ老も。風情少なき。有様を。

上歌　見る度に。かはる姿やます鏡。〳〵。うつる月日は程もなく。昨日は少年今日白頭の雪とのみ。積り〳〵て老が身の。春の光に当れども。わびしき業を柴取りて。帰る山路の。苦しさよ

すなわち、『続拾遺和歌集』十七の基俊の歌『老いらくのかげみるたびにます鏡　猶むかしこそ恋しかりけれ」に拠った「見る度に。かはる姿やます鏡。うつる」の詞章をもとに、近松はこの局面を発想したものと思われる。『国性爺』のそのところの文章は、

月にうつろふ父の顔。鏡の面にちか〳〵と映し取つて引きくらべ。引き合はせてよく〳〵見れば　絵にとどめしはいたしへの。顔も艶ある緑の鬢　鏡は今の老いやつれ。頭の雪と変れども変らで残る面影の。目元口元そのままにわが影にもさも似たり。爺方譲りの額のほくろ　親子の印疑ひなし。さては誠の父上か。なう懐かしや恋しや

とあり、廻り逢って鏡を中に昔今の姿を見る趣向の拠って来たるところが、前段より引き続いてこの謡曲の文辞にあったことを知る。

この段に至っても『龍虎』の使用の程が、このように密接であるとするならばさらに三段目の展開と引きくらべて追ってみる必要があろう。謡曲は次のごとく、右の詞章に引き続いて展開する。

ワキ詞　如何にこれなる山人に尋ね申すべきことの候。シテ　不思議や(イ)見馴れ申さぬ御姿なり。いかさまこれは入唐の沙門にて御座候ふな。ワキ　実によく御覧じて候ふものかな。我日本より此国に渡り。仏法流布の古蹟を尋ね。これより渡天の志あるにより。遙々思ひ立ちて候。シテ　(ロ)さては渡天の御為かや。昔は聞きつ近き世には。有難かりける御事かな。ツレ　実に痛はしや遙々と。行くへも遠き旅衣の。詞　シテ　立ち出で給ひし日本の。仏法東漸を振り捨てゝ。ワキ　去り来し法の跡遠き。シテ　昔語を今さらに。ワキ　誰か委しく。シテ　夕月夜。地歌　星の国にと行く雲の。〳〵。果しはあらじ人心。(ハ)心せよ胸の月。よその光を尋ねても。何にかはせんまのあたり。見るを尋ぬるはかなさよ〳〵。

日本より仏蹟を求め渡天の志で唐土に渡ってきた僧侶と、龍虎の化身の樵夫の間での問答であるが、この局面は、日本から明の復興を願って娘・聟を頼って訪ねてきた人達と娘錦祥女との問答、応答にも対応する面がある。したがって、ここから翻案することは容易で、例えば(イ)については、これを滑稽に取れば母を城中に入れてからの侍女の風俗批評の件、

「なんと日本の女子見てか。目も鼻も変らぬが　をかしい髪の結び様。変つた衣裳の縫ひ様　若い女子もあれであらう。裾も褄もほら〳〵ほら〳〵と。はつと風が吹いたら太股まで見えさうな。ァァ恥づかしい事ぢやあるまいか。…ホウ　ありがたい国ぢやの」と、目を細めてぞうなづきける。

につながってゆくであろう。(ロ)の部分についても、錦祥女が鏡と絵姿によって父と知り、

「さては誠の父上か。なう懐かしや恋しや母は冥途の苔の下。日本とやらんに父上ありとばかりにて。便りを聞かんしるべも

なく　東の果てと聞くからに。明くれば朝日を父ぞと拝み。暮るれば世界の図をひらき　これは唐土これは日本。父はここにましますよと　絵図では近いやうなれど。三千余里のあなたとや　この世の対面思ひたえ。もしや冥途で逢ふ事もと　死なぬ先から来世を待ち。歎きくらし泣き明かし　二十年の夜昼は。わが身さへつらかりし　よう生きてゐて下さつて。父を拝むありがたや」と声も惜しまぬ嬉し泣き。

とある、遠い異国に在す父との対面をこの世では不可能とあきらめていた心情を吐露する件に、つながるとも考えられる。

(ロ)から(ハ)の「実に痛はしや…」にかけての文辞も、遠来の母親を縄にかけて招じ入れる条と関係する。

はるかなる夢も通はぬ。唐土に通へば。通ふ親子の縁。恩愛の綱むすび合い。むすぶあまりの縛り縄　かかる例は異国にも。まれに咲き出す雪の梅……また高手小手のいましめは十悪五逆の科人(とがにん)とも　見る目いぶせく痛はしく。さま〴〵に宮仕へ　誠の母といたはりし。心の内こそ殊勝なれ。

謡曲の(ニ)の部分は、天竺を尋ねるまでもなく、ここ眼前に悟り種の見えていることに気付かぬ浅はかさを説く詞章であるが、「胸の月」は胸中の曇らず清きことをいう。『続古今和歌集』八、土御門院の「毎夜坐禅観水月」「むねのつきこころのみづもよなよなのしづかなるにぞすみはじめける」などが参照される。

さて、これは考えすぎかも知れぬが、『国性爺』三段目切の最大の見せ場、錦祥女の自害の局面をこの(ニ)の文辞と重ね合せてみたい。人々が錦祥女が既に胸を刺して瀕死であることに気付かず、はかなく言い争う中に、

「ァァ〳〵　これなう〳〵病死を待つまでもなし。只今流せし紅(べに)の水上(みなかみ)を見給へ」

と胸を押し拡げると胸元は朱に染んでいたというこの局面とも私にはつながるように思える。錦祥女の澄み切った心に対して、人々は動転して驚き騒ぐ。

最後の箇所については付会の恐れもあるが、他については両者の関係は否定し得ないであろう。三段目にまで『龍虎』の影の及んでいることは段切の次の詞章で瞭然である。

甘輝は今や迷いなく和藤内を大将軍と仰ぎ、延平王国性爺鄭成功の名を捧げる。装束を唐風に改め、その英姿を錦祥女・母は見上げ見下ろし息絶えた。

鬼をあざむく国性爺　龍虎と勇む五常軍。涙に眼はくらめども母の遺言そむくまじ。妻の心をやぶらじと　国性爺は甘輝を恥ぢ。甘輝はまた国性爺に恥ぢてしぼるる顔かくす。

ここに近松は「龍虎」の陰微を顕わにする。和の国性爺が龍であり、唐の五常軍甘輝が虎である。すでに「千里が竹」においても和藤内は龍に当てられていた。そのことはさらに三段目結びのこの言葉によって明瞭に示される。

末代不思議の智仁の勇士。玉ある渕は岸やぶれず。龍すむ池は水かれず。かかる勇者の出生す　国国たり君君たる。日本の麒麟これなるはと　異国に。武徳を照らしけり。

五

愛する妻の犠牲の死のもと味方した甘輝、その為には母をも失う大きい犠牲を払った和藤内、この唐と大和の二将の協心は、共に不

倶戴天の敵への怒りと相まって、その後の戦局を速い勢いで展開させ、大団円に突き進む。

近松は和唐内の命名に象徴的に見られるごとく、本作を唐大和両国の対比で描いていった。勇力無双の和唐内の人物設定に、当初から彼と対照的な唐の勇士の設定をも考えていたに違いない。それが「龍虎」の比喩となって現われたものと思われる。この発想があって初めて謡曲『龍虎』の利用という結果に結びついたのではあるまいか。ただに二段目切の趣向にとどまらず、三段目の全体を覆う構想にまで活用されているだけに、そのように思われてならない。

伊豆の虎舞に龍が加わった裏には、次のような事情があったと古記は記す。

扨、龍の登場は、寛永の頃、河内村弘陽院と申西門寺の和尚、町内所縁の僧ニテ、町長ェ告テ曰、虎有は龍なくて叶はず。虎嘯は風をせうず。龍吟すれは雲を起ゞと言語有るニ依て、弘陽住僧、於同寺に初めて龍を工作して、而後に是を町内ェ譲る。此時ョリ龍虎全くして、実にも珍らしき俄ねり物と、四方の君子挙て是を評す(「永続虎之巻」弘化二年)。

『国性爺』の場合も、虎の陰に龍が伴っていた。ただそれは雲居に隠々と深く潜んでいたというべきであろう。

注　『国性爺合戦』の本文の引用は、新潮日本古典集成『近松門左衛門集』を用いた。謡曲『龍虎』は、元禄八年版本と大差のない名著全集『謡曲三百五十番集』の本文を用いた。

—本学教授—